

第7回 統計実践ワークショップ

DATE

2026年9月24日（木）

15:00 — 17:00（予定）

VENUE

豊中キャンパス OSIPP棟 6F

会議室

大阪大学の人文・社会科学系分野に属する教員や院生，特にデータ・統計分析を使って研究しているメンバーの交流の場を設けることを目的として開催されている有志のワークショップです。参加登録は不要です。お気軽にお立ち寄りください。（懇親会申し込みはウェブサイトにあるフォームからお願いします）

講演内容 PROGRAM

1 ニホンザルの攻撃性が個体間の逃避開始距離に及ぼす影響

片山 洸彰 人間科学研究科 博士後期課程

社会的知識とは、集団のメンバーに関する情報のことであり、非ヒト霊長類の研究では、他個体の順位や血縁関係を把握することが適応的行動につながるとされてきた。しかし、個体が他個体のパーソナリティ（性格）も把握しているのかは十分に検証されていない。本研究では、ニホンザルが他個体の攻撃性を把握しているのかを検証するために、個体間の接近-回避交渉に着目した。結果として、サルは攻撃性の高い個体との交渉では逃避開始距離が長くなった。このことより、ニホンザルにとって性格が重要な社会的知識となりうることを示唆された。本発表では、動物の行動を定量化する方法である行動観察法と、分析に使用した統計モデルについて紹介する。本発表はプレプリント (<https://doi.org/10.1101/2025.07.21.664030>) に基づくものである。

2 Asian Immigration and the Boundaries of American Identity

池内 里桜 国際公共政策研究科 博士後期課程

本研究は、アメリカへのアジア系移民の流入が、アジア系アメリカ人と白人をはじめとする非アジア系アメリカ人との間の象徴的・社会的境界をどのように変化させるのかを検証する。シフト・シェア型操作変数法による分析の結果、アジア系移民の流入は、アジア系アメリカ人と白人系アメリカ人との異人種間結婚を増加させることが明らかになった。また、非アジア系アメリカ人のアジア人に対する態度もより好意的になることが確認された。これらの結果は、同じ民族集団の移民の流入が、民族的アイデンティティと国民的アイデンティティの相互作用を通じて、アジア系アメリカ人をめぐる境界を再編させる可能性を示唆している。

3 言語はどんな“形”をしているかーベッチ数を利用したトポロジー的なn-gram分析の提案と実践

中山 拓人 人文学研究科 言語文化学専攻

現代言語学の要素還元主義は、各要素についての性質については豊富な研究結果が蓄積されてきたが、要素間の接続については未だに未解明な点が多い。この課題に対する1つの方略として、「ものの繋がり方」に注目する分野であるトポロジーを応用する事例を示すことを目的とする。ベッチ数とは、その中でも特にループ構造の数に相当し、n-gramにおける幾何学的不変量を抽出することができる。多言語比較の結果、特定の切り出し方に依存せずに、類型論的特徴パターンの抽出可能性が示唆された。一方で、適用するn-gramの単位や、幾何学構造の解釈などの課題も、まだまだ多く存在すると言える。

ORGANIZED BY（有志）

三浦麻子（人間科学研究科）
松林哲也（国際公共政策研究科）
吉賀夏子（人文学研究科）

CO-HOSTED BY

人間科学研究科／人文学研究科

CONTACT

松林哲也（国際公共政策研究科）
matsubayashi.osipp@osaka-u.ac.jp



詳細はこちら